

長期モニタリング計画 評価項目の評価シート案

評価項目	Ⅶ レクリエーション利用等の人為的活動と自然環境保全が両立されていること。				数 値 化 の 列 は 非 表 示 ↓
評価項目選定理由	知床世界自然遺産地域管理計画に記載されている。				
評価案の作成主体	適正利用・エコツーリズムWG（海域WG、エゾシカ・ヒグマWGと一部調整）				
評価年月	2021年2月（予定）				
評価対象期間	2012年～2019年（ただし一部のデータは2011年以前のものも使用）				
総評	評価値 3.3 注視すべき状態 良好 要改善 <各モニタリング結果の評価分布> 0%20%40%60%80%100% 5 4 3 2 1				3.33
	<注視すべき状態> 適正利用に向けた管理・取組は概ね良好な状態であり、ヒグマ関連以外では利用者等による自然環境への明確な影響は確認されていない。ヒグマとの軋轢やヒグマ捕殺数が増大傾向であり、状況改善が必要。なお、海鳥の生息数等との両立については、現時点で営巣地や個体への接近をあらわすデータが収集できていないため、検証に向けて改善が必要。				
対応するモニタリング項目とその評価	No.	モニタリング項目	評価基準（概要）	個別評価	数値化
	15	ヒグマによる人為的活動への被害状況	人身事故を起こさないこと 危険事例の発生を抑えること 農業被害を削減させること		1
	19	適正利用に向けた管理と取組	エコツーリズム戦略を実現するための管理と取組が行われているか		5
	20	適正な利用・エコツーリズムの推進	エコツーリズム戦略に基づく適正な利用及びエコツーリズムの推進が行われているか		4
	(基礎情報・参考情報に関するモニタリング状況)				
	6	ケイマフリ・ウミネコ・オオセグロカモメ・ウミウの生息数、営巣地分布と営巣数調査		○	
	21	利用者数の変化		○	
	24	年次報告書作成による事業実施状況の把握		○	
25	年次報告書作成等による社会環境の把握		○		

数値化の列は非表示↓

長期モニタリング計画 評価項目の評価シート案

評価の理由等	「レクリエーション利用等の人為的活動と自然環境保全が両立されていること」 ○No. 15 ヒグマによる人身事故を起こさないこと、人間の問題行動及び漁業活動に係る危険事例の発生を5年間で計12件以下の水準に抑えること、斜里町の農業被害額及び被害面積を2020年度までに2016年度比で1割削減させること ヒグマによる人身被害、農林水産業被害、地域住民や漁業者による危険事例が発生しており、評価基準に非適合・悪化と評価された。一方で、レクリエーション利用における人身被害は発生しておらず、知床五湖園地では利用調整地区制度を導入した結果ヒグマ出没による閉鎖日数は大幅に減少した。ただし、利用者の問題行動による危険事例は減少していないことから、引き続きヒグマに関する危険周知、適切な距離に関する普及啓発に努める必要がある。 ○No. 19 「知床エコツーリズム戦略 9. 具体的方策」を実現するための管理と取組が行われていること 利用コントロールやルールの設定と指導の件数は増加し、エコツーリズム検討会議を中心に利用機会の確保、管理の強化、モニタリング、利益の還元、情報発信などが関係者により取り組まれており、知床エコツーリズム戦略を実現するための管理と取組が行われていると判断され、評価基準に適合・改善と評価された。 ○No. 20 「知床エコツーリズム戦略 5. 基本方針（１）（２）」に基づき、適正な利用およびエコツーリズムの推進が行われていること 地域の観光や利用に関する団体の大半が知床エコツーリズム戦略の方針を尊重した活動を展開し、自然環境の保全に配慮した観光が実施されているため評価基準に適合、環境の大きな変化は報告されていないため現状維持と評価された。外国人も含めた利用者数の増加、ヒグマとの軋轢、気候変動による影響などが課題として指摘されている。 <参考> ○No. 6 およそ登録時の営巣数が維持されていること ケイマフリの営巣数は増加したが、ウミネコ・オオセグロカモメ・ウミウの営巣数は減少しており、評価基準に非適合・悪化と評価された。ただし、動力船やシーカヤックなどのレクリエーション利用による営巣地や個体への接近をあらわすデータは収集できておらず、その影響は明らかではないため、今回評価においては参考情報とする。今後、レクリエーション利用と自然環境保全の両立について評価するには、営巣箇所ごとの観光船の利用頻度を算出するなど人為的な影響のデータを収集し、相関関係を検証する必要がある。
遺産地域の管理施策に関する特記事項・課題等	（評価項目の評価結果に密接に関連する管理施策として、特筆すべき事項があれば記載。また、管理施策の現状等を踏まえた今後の遺産管理上の課題について記載） 知床エコツーリズム戦略にもとづき、適正利用およびエコツーリズムを実現するための地域からの提案と検討会議での承認による取組が成果をあげている。一方で、承認制度の複雑さや地域外の認知の低さなどから、新たな利用に関する提案数が実態よりも少ない可能性があり、戦略や周知方法について改善を検討すべきである。また、社会状況の変化に応じて、既存の地域ルールや制度との整合が課題となりつつある。
今後の遺産地域の管理の方向性に関する意見	（調査手法等へのコメントではなく、上記課題を踏まえた「遺産地域の管理の方向性」等についての助言等があれば、適宜記載。） 管理者、地域関係者、専門家による適正利用エコツーリズム検討会議を中心とした取り組みが特徴的である。レクリエーション利用と海鳥、ヒグマ、高山植物等の自然環境との因果関係には明らかにできないものもあり、関係するワーキングと連携したモニタリングと分析、評価、それにもとづく適正利用に向けた取組の推進が望まれる。

適正利用・エコツーリズムWG 担当 モニタリング項目評価シート案

(評価者：エゾシカ・ヒグマWG)

モニタリング項目	No. 15 ヒグマによる人為的活動への被害状況		
モニタリング実施主体	環境省、林野庁、北海道、斜里町、羅臼町、標津町、知床財団		
対応する評価項目	VII. レクリエーション利用等の人為的活動と自然環境保全が両立されていること。		
モニタリング手法	ヒグマによる被害や危険事例、人間側の問題行動、施設の開閉状況をアンケートや通報、ヒグマ対策業務等を通じて情報収集。		
評価指標	ヒグマによる人身被害の発生件数、危険事例の発生状況、人間側の問題行動の状況、施設の開閉状況、ヒグマの有害捕獲数、ヒグマによる農林水産業被害状況。		
評価基準	・ヒグマによる人身被害を起こさないこと ・人間側の問題行動に起因する危険事例及び漁業活動に係る危険事例の発生を、5年間で計12件以下の水準に抑えること ・斜里町における農業被害額及び被害面積を2020年度までに2016年度比で1割削減させること		
評価	☐ 評価基準に適合		☒ 評価基準に非適合
	☐ 改善	☐ 現状維持	☒ 悪化
	[評価対象期間]2006年～2019年 【人身被害の発生件数（2012～2019年）】 ・2012～2016年は人身被害なし、2017年と2019年に斜里町において人身被害が2件発生した。 【斜里町・羅臼町・標津町で発生した危険事例（2017～2019年）】 ・ヒグマの問題行動による危険事例が計54件発生した。 ・利用者の問題行動に起因する危険事例は計30件発生した。 ・地域住民や事業者の問題行動に起因する危険事例は計32件発生した。 ・漁業活動に係る危険事例は計8件発生した。 ・2012～2016年、3町での危険事例は105件。 【斜里町・羅臼町・標津町でのヒグマ有害捕獲頭数（2017～2019年）】 ・3年間で合計97頭（うちメス37頭）が捕獲された。 【施設の開閉状況】 ・知床五湖園地については、近年地上遊歩道でのヒグマとの遭遇が増加傾向にあるが、ツアー中止回数は減少傾向にあった。 ・フレペの滝遊歩道については、2009年以降で2015年が最も閉鎖回数が多かった。その後は2015年の半数程度で推移。		

	【農林水産業被害】 ・斜里町における農業被害額は、2006 年以降で 2010 年が最も多く、その後は減少傾向。
今 後 の 方 針	・遺産地域内で人身被害の発生を抑制し、危険事例の発生件数を減らすため、利用者に対する働きかけ（普及啓発等）を強化している。 ・ヒグマによる人身被害が発生した場合の対処マニュアルを作成している。

(評価者：適正利用・エコツーリズムワーキンググループ)

モニタリング項目	No.19 適正利用に向けた管理と取組		
モニタリング実施主体	環境省（適正利用・エコツーリズム WG 事務局）		
対応する評価項目	Ⅶ. レクリエーション利用等の人為的活動と自然環境保全が両立されていること。		
モニタリング手法	知床白書掲載内容及びエコツーリズム検討会議資料や行政機関等への聞き取り調査により適正利用に向けた管理と取組を抽出し列挙。		
評価指標	管理と取組の実施状況		
評価基準	「知床エコツーリズム戦略 9. 具体的方策」を実現するための管理と取組が行われていること。		
評価	■評価基準に適合		□評価基準に非適合
	■改善	□現状維持	□悪化
	[評価対象期間]2010 年～2017 年 [評価] 2010 年度～2017 年度において、適正利用に向けた管理や取組は全体として拡充していることが確認できた。特に 2010 年から 2015 年にかけては利用コントロールや守るべきルールの設定と指導に係る件数の増加が顕著であり、その内容も多様化した。2005 年の遺産登録から 5 年以上が経過し、利用に関する課題が表面化した時期とも捉えることができる。具体的には「エコツーリズム検討会議」「知床五湖利用調整地区制度」「知床世界遺産条例」「ヒグマ保護管理方針」など管理の基本がこの期間に策定・開始され、運用が続けられている。管理の強化と並行して、ガイド利用や利益の還元、文化的資産の活用など新たな取組も開始された。特に 2015 年から 2017 年にかけては多言語化やウェブサイトを活用した情報発信が活発化し、より幅広い利用者に対して適正利用を促す体制づくりが進められた。さらに、こうした取組を支える基盤として施設整備とモニタリングが行われている。 以上より、「知床エコツーリズム戦略 9. 具体的方策」を実現するために必要な管理や取組が行われていることから「評価基準に適合」とし、過去と比較して管理や取組が拡充していることから「改善」と評価する。 ※評価のめやす 「現状維持」： 「改善」「悪化」以外の状況。 「改善」： 前回（過去）と比較して必要な管理や取組がより充実し、前進した。 「悪化」： 前回（過去）と比較して必要な管理や取組が縮小し、後退した。		

今 後 の 方 針	本調査は 2020 年度が評価の初回となるため、過年度については 2010 年度と 2015 年度を、最新については 2017 年度（第 1 期評価時点での知床白書最新版）をとりまとめ評価対象とした。今後は、毎年調査を行い、5 年毎に評価を実施する。とりまとめにあたっては、件数と内容に着目した整理を行う。また、知床白書に記載がない事業についても漏れが無いよう、とりまとめ方については引き続き検討が必要。
-----------	---

No. 19 適正利用に向けた管理と取組 調査結果まとめ

本資料は、モニタリング項目 No. 19 調査シートの結果を簡易的にまとめたもの。

(1) 利用のコントロール

継続的に実施されている取組としてカムイワッカ地区のマイカー規制が代表的である（1999 年～）。2011 年からは知床五湖利用調整地区制度が開始され、ガイドの育成や活用、利益の還元などの取組にも波及していると考えられる。

(2) 守るべきルールの設定と指導

2010 年度にエコツーリズム検討会議が設置され、利用に関する合意形成の場が整備された。2015 年度には先端部地区利用の心得の点検など既存ルールの見直しも行い、内容の拡充が進められている。新たなルール設定に加えて、監視員の配置や管理機関による巡視、スノーモービル乗り入れの取締りなど、地域に根付いたルールの運用も関係機関の定常的な業務として継続されている。

(3) 情報発信

関係団体がそれぞれウェブサイトやパンフレット、施設運営等を通じた情報発信に取り組んでいる。特にヒグマに関する取組が増加し、発信する媒体の多様化に加えて「ヒグマの餌やり禁止キャンペーン」など地域を巻き込む動きも生まれた。また、SNS 等の活用によりリアルタイム情報の提供も活発化した。

(4) ガイドの育成とガイド利用の推奨

知床五湖登録引率者の育成制度が継続的に実施されている。また、厳冬期の知床五湖エコツアーや赤岩地区昆布ツアーにおいて、エコツーリズム戦略で提案された新たな利用が試行・実施されている。

(5) 文化的資産等の活用

斜里ではナショナルトラストにより取得した資産（運動地）の公開事業を、羅臼では伝統的な羅臼昆布漁の魅力を伝えるエコツアーを実施しており、各町とも保全に留意した文化的資産等の活用が進められている。

(6) 利益の還元

2010 年度と比較して近年取組が進行しつつある。特に 2014 年には収益の環境保全への還元等をテーマとした知床ウトロ海域環境保全協議会が発足し、ケイマフリをシンボルとした保全事業が行われている。

(7) 施設整備

2010 年度は主として道路の法面補修や災害防止に係る工事が実施され、安全に観光するための基盤が整備された。2015 年度にかけては羅臼湖歩道や羅臼岳登山道の修復工事等が行われ、自然環境の

保全再生や利用分散に向けた維持管理が進められた。また、利用拠点となる知床自然センターも2015年より全面改修が実施された。

(8) モニタリング

総合的かつ定期的な調査として利用状況調査が毎年実施されている。また、「羅臼海域の利用適正化に向けた調査」「ヘリコプタークルージング騒音調査」「五湖冬季適正利用調査」など、発生した課題や新たな取組の開始に併せて各種調査が実施されており、観光客の評価やニーズ、行動特性の変化等に応じたモニタリングが進められている。

モニタリング項目 No.19 調査シート

エコツーリズム戦略 9. 具体的方策	2010 年度 (H22)				2015 年度 (H27)				2017 年度 (H29)			
	新規/継続	内容	白書掲載頁	備考	新規/継続	内容	白書掲載頁	備考	新規/継続	内容	白書掲載頁	備考
(1) 利用コントロール 自然環境の保全、観光客の安全確保、原始性の保持、付加価値の向上等の目的に応じた利用コントロールが実施されているか。	継 1999- 新	カムイワッカ地区マイカー規制の実施 知床五湖利用調整地区導入準備（実証実験）	P. 12 P. 6, 87	70 日間 31 日間	新 継 1999- 継 2011- 継 2011-	スカイバスツアーの実施 カムイワッカ地区マイカー規制の実施 知床五湖利用調整地区制度の運用 硫黄山登山道道路特例使用	P. 54 P. 58, 69 P. 70 P. 57	22 日間 25 日間 7 カ月間 96 日間	継 1999- 継 2011- 継 2011-	カムイワッカ地区マイカー規制の実施 知床五湖利用調整地区制度の運用 硫黄山登山道道路特例使用	P. 58, 69 P. 70 P. 57	30 日間 約 7 カ月間 100 日間
(2) 守るべきルールの設定と指導 自然環境の保全、観光客の安全確保、地域の文化・生活への配慮等の目的に応じたルールが設定されているか。また、それらのルールの指導が行われているか。	新 新 継 1984- 継 継 継	適正利用・エコツーリズム検討会議の設置 ヒグマ保護管理方針検討会議の設置 知床岬の利用規制に関する申し合わせの行政機関合同巡視 スノーモービル、航空機乗入れ規制の巡視・取締り カムイワッカ地区の監視員配置 管理機関による巡視	P. 7, 97-98 P. 7, 97 P. 91 P. 91 P. 91 P. 91	140 人日 1,891 人日	新 新 新 継 1984- 継 2009- 継 2012- 継 継 継	北海道知床世界自然遺産条例の制定 ヒグマ保護管理方針の点検と見直し 先端部地区利用の心得の点検 知床岬の利用規制に関する申し合わせの行政機関合同巡視 羅臼海域の利用適正化に向けた調査 ヒグマ保護管理方針に基づく安全対策の実施 スノーモービル、航空機乗入れ規制の巡視・取締り カムイワッカ地区の監視員配置 管理機関による巡視	P. 4, 74 P. 25 P. 54 P. 72 P. 62 P. 66 P. 73 P. 71 P. 7-11	 66 日間 2,426 人日	新 継 1984- 継 2012- 継 継 継	第3期知床世界自然遺産地域多利用型統合的海域管理計画の策定 知床岬の利用規制に関する申し合わせによる行政機関合同巡視 ヒグマ保護管理方針に基づく安全対策の実施 スノーモービル、航空機乗入れ規制の巡視・取締り カムイワッカ地区の監視員配置 管理機関による巡視	P. 40 P. 72 P. 66 P. 73 P. 71 P. 5-9	66 日間 190 人日
(3) 情報の発信 地域主体のエコツアーの増加や守るべきルールの周知を目的とした情報発信が行われているか。	新 新 継 継 継	知床自然遺産登録 5 周年記念事業の実施 先端部地区利用の心得普及のための web サイトの作成 Web やパンフレット等を通じた普及啓発 利用施設等での情報提供、情報発信 携帯トイレの普及（リーフレットの作成）	P. 6, 91, 93 P. 89, 95 P. 95 P. 91-95 P. 95		新 新 継 2012- 継 2013- 継 継 継 継	知床自然遺産登録 10 周年記念事業の実施 外国人旅行者向け情報発信の強化事業の実施 ヒグマ保護管理方針に基づく情報周知 ヒグマ餌やり禁止キャンペーンの実施 Web 等を通じた普及啓発 利用施設等での情報提供、情報発信 携帯トイレの普及（リーフレットの作成） ヒグマ注意喚起メールの配信、チラシの作成及び新聞への折り込み	P. 3, 73 P. 54 P. 66-67 P. 73 P. 73 P. 73-74 P. 72 P. 73		新 新 継 2015- 継 2013- 継 2012- 継 継 継 継 新	ヒグマ情報をレクチャーや web で発信 日本語＋英語表記の登山道マップ販売 外国人旅行者向け情報発信の強化事業の実施 ヒグマ餌やり禁止キャンペーンの実施 ヒグマ保護管理方針に基づく情報周知 利用施設等での情報提供、情報発信 携帯トイレの普及（リーフレットの作成） 寄付金を活用したレクチャーの実施やパンフレット配布 ヒグマ注意喚起メールの配信、チラシの作成及び新聞への折り込み カムイワッカ・シャトルバスに関するチラシの作成及び配布	P. 66-67 P. 54 P. 54 P. 66 P. 66-67 P. 68-69 P. 71 P. 73 P. 73 P. 70	
(4) ガイドの育成とガイドの利用推奨 ガイドの育成が行われ、ガイド利用が推奨されているか。	継 2008- 継	知床五湖の冬期利用 知床五湖登録引率者の育成	P. 11-12 P. 89		新 継/変 2008- 継 2010- 継 2014-	知床五湖の早朝利用の実施 厳冬期の知床五湖エコツアー事業の実施 知床五湖利用調整地区制度による登録引率者の新規養成（3 名）・登録（30 名） 赤岩地区昆布ツアー事業の実施	P. 54 P. 73 P. 70 P. 53		継/変 2008- 継 2010-	厳冬期の知床五湖エコツアー事業の実施 知床五湖利用調整地区制度による引率者の登録	P. 54, 56 P. 70	

エコツーリズム戦略 9. 具体的方策	2010 年度（H22）				2015 年度（H27）				2017 年度（H29）			
	新規/継続	内容	白書掲載頁	備考	新規/継続	内容	白書掲載頁	備考	新規/継続	内容	白書掲載頁	備考
（５）文化的資産等の活用 保全に留意しながら文化的資産等が活用されているか。	継	100 平方メートル運動地の土地取得完了	P. 7		新 継 2014-	「しれとこ森づくりの道 ホロベツルート」の開設 赤岩地区昆布ツアーの実施	P. 45 P. 53		新 継 2014-	「しれとこ森づくりの道 開拓小屋コース」の開設 赤岩地区昆布ツアーの実施	P. 44 P. 54	
（６）利益の還元 観光利用によって得られた利益が地域の自然や社会に還元されているか。					継 2008- 継 2011- 継 2014- 継 2014-	厳冬期の知床五湖エコツアーの実施 知床五湖利用調整地区における住民還元キャンペーン ウトロ海域環境保全協議会の取組 赤岩地区昆布ツアーの実施	P. 73 - P. 62 P. 53		継/変 2008- 継 2011- 継 2014- 継 2014-	自主除雪による厳冬期の知床五湖エコツアーの実施 知床五湖利用調整地区における住民還元キャンペーン ウトロ海域環境保全協議会によるハンドブック販売益の保全活動への還元 赤岩地区昆布ツアーの実施	P. 54 P. 62 P. 54 P. 54	
（７）施設整備 年次計画による計画的な施設整備が行われているか。	継 継	仮設携帯トイレブースの設置と状況調査 知床公園線災害防除事業（カムイワッカ） 知床公園線羅臼線防雪事業（相泊、瀬石） 一般国道 334 号斜里町岩尾別法面補修工事 イワウベツ川治山ダム改修工事 岩尾別カシワ林防鹿柵設置 羅臼岳岩尾別登山道保全管理	P. 89 P. 31-32 P. 29-30 P. 33-34 P. 47-48 P. 49-50 P. 89		新 新 新 新 新	羅臼岳岩尾別登山道保全修復工事 知床自然センター改修事業 相泊地区治山工事 知床連山登山道保全管理 羅臼岳登山道保全管理	P. 76-77 P. 79 P. 80-81 P. 71 P. 71		継 2015- 継 2015- 継 継 継 継	知床自然センター改修事業 相泊地区治山工事 オッカバケ川治山工事 一般国道 334 号羅臼町翔雲橋補修外工事 知床連山登山道保全管理 羅臼岳登山道保全管理	P. 83-84 P. 76-78 P. 78-79 P. 80-82 P. 71 P. 71	
（８）モニタリング 観光客の評価（満足度や感想など）やニーズ、行動特性の変化等がモニタリングされているか。	継 2004- 継	知床世界自然遺産地域の利用状況調査 ウトロ海域の利用動向調査	P. 8-23 P. 89		継 2004- 新 継 継 2013- 継 2014- 継 2014-	知床国立公園の利用状況調査 ヘリコプタークルージング騒音調査 知床半島先端部地区利用状況調査 羅臼海域の利用適正化に向けた調査 五湖冬季適正利用調査 知床沼植生モニタリング	P. 24 - P. 24 P. 62 P. 24 P. 64		継 新 新 継 2014- 継 2014-	知床世界自然遺産地域の利用状況調査 知床五湖利用適正化計画改定実験の実施 知床五湖地上遊歩道の植生調査の実施 知床半島先端部地区利用状況調査 五湖冬季適正利用調査 知床沼植生モニタリング	P. 46-52 P. 69 P. 70 P. 22 P. 56 P. 64	

凡例
新：新規の取組
継：継続的に実施されている取組
変：過去にも実施されているが、大きな変化があった取組

(評価者：適正利用・エコツーリズムワーキンググループ)

モニタリング項目	No.20 適正な利用・エコツーリズムの推進		
モニタリング実施主体	環境省（適正利用・エコツーリズム WG 事務局）		
対応する評価項目	Ⅶ. レクリエーション利用等の人為的活動と自然環境保全が両立されていること。		
モニタリング手法	遺産地域利用関係者への聞き取り調査により適正な利用やエコツーリズムの推進状況を把握		
評価指標	「知床エコツーリズム戦略」の基本方針に沿った事業の実施状況、利用者の増減、客層の変化、管理に対する懸念		
評価基準	「知床エコツーリズム戦略 5. 基本方針（１）、（２）」に基づき、適正な利用およびエコツーリズムの推進が行われているか。		
評価	☒ 評価基準に適合		☐ 評価基準に非適合
	☐ 改善	☒ 現状維持	☐ 悪化
[評価対象期間]2019 年 [評価] 知床遺産地域における観光や利用に関連する団体への聞き取り調査において、大半の団体が「知床エコツーリズム戦略 5. 基本方針（１）基本原則」を尊重した活動を展開していると回答しており、知床におけるエコツーリズムの考え方が浸透していると評価できる。「知床エコツーリズム戦略 5. 基本方針（２）観光利用の推進にあたって必要な視点」についてもほぼ全ての項目において過半数の団体が意識しており、特に自然環境の保全への配慮については具体的な取組も見られることから、事業者の意識が高いことが明確に示された。 一方で、「自己責任の原則が認知され、管理責任の分担が行われている」「順応的管理型であること」等は認知が低い様子が見受けられたことから、今後更に改善の余地がある。 以上より、「知床エコツーリズム戦略 5. 基本方針（１）（２）」が浸透・尊重されており、具体的な取組も進んでいることから、適正な利用およびエコツーリズムの推進が行われているものと判断して「評価基準に適合」と評価する。また、過去と比較して新たな取組が拡充したと見られる一方で、自然環境や利用への懸念も多く挙げられていることから「現状維持」と評価する。 ※評価のめやす 「現状維持」：多くの事例で「改善」「悪化」以外の状況であり、適正な利用・エコツーリズムの推進が継続的に行われていると判断できる。 「改善」：前回（過去）と比較して、必要な取組がより充実・拡充した。それにより、利用者数や客層が変化するなど、自然環境や利用への懸念が少なくなった。 「悪化」：前回（過去）と比較して必要な取組が縮小した。それにより、運用状況の悪化や利用者数の急激な増加、客層の変化等があり、自然環境や利用への影響に懸念が増加している。			

今 後 の 方 針	同様の調査を年次で継続してデータの充実を図り、傾向の把握が可能な状態とすることが必要である。また、各団体から寄せられた具体的な事例や意見を踏まえ、大きな懸念が残る事案については注視し、必要に応じて他WGと情報共有を行うことやモニタリング等を実施することも検討すべきである。 なお、調査の趣旨について地域の理解を促進するため、調査結果をエコツーリズム検討会議において公開し、フィードバックを図る。
-----------	---

No. 20 適正な利用・エコツーリズムの推進 調査結果まとめ

本資料は、モニタリング項目 No. 20 調査シートの結果を簡易的にまとめたもの。

2019 年度に実施した知床遺産地域利用団体への聞き取り調査において、対象とした 11 団体中 9 団体が「知床エコツーリズム戦略 5. 基本方針（1）基本原則」である「遺産地域の自然環境保全」、「良質な自然体験の提供」、「持続可能な地域社会と経済の構築」に該当する活動を行っているとは回答しており、エコツーリズム戦略の趣旨を理解・尊重した活動が展開していると判断できる。

具体的には、「観光船のエンジンやスクルーに自然及び野生動物に配慮したものを使用している」「ツアーを通して利用者に自然に関する知識を学んでもらえるよう努力している」「知床五湖利用調整地区による利用のコントロール」など、自然環境への配慮に関する取組は行政・事業者問わず実施されている。また、ツアーに漁師とのふれあいや博物館の訪問等を取り入れ、地域の文化や歴史への理解の推進を図る事業もある。

利用者や参加者数については、「減少している」との回答はなく、「増加している」との回答が多かった。知床国立公園の利用者数そのものは増加傾向にないことから、エコツアーや特定のアクティビティへの参加者が増加している可能性がある。

利用者意識や客層の変化については、「羅臼湖利用者について、昔に比べて路上駐車が減った。またゴミも少なくなった」「自然環境への配慮は十分に理解されている」「知床を知るにはガイドが必要と言う認識が定着してきた。」「連泊客が増加した」などポジティブな変化の意見がある一方、「人間側もクマへの警戒が薄れてきている」「知床に行けばクマを気軽に観られると受け取られている。」など野生動物との関係性についてネガティブな変化が確認できた。

フィールドや地域の自然環境については、全ての団体が「気になることや心配なことがある」と回答しており、保全に対して強い関心を持っていることが窺える。主な懸念事項として、野生動物との軋轢、外国人対応の不足、利用の集中による生態系への影響（野鳥の営巣妨害等）等が挙げられた。また、「海水温の上昇」「暖冬による積雪の減少」「野生動物の行動変化」など気候変動に対する影響の懸念が共通しており、こうした現象が各活動に影響していることが確認された。

また、交通システムの課題（二次交通、マイカー規制等）、制度やシステムの複雑さ、利用できるフィールドのバリエーション不足等の課題が指摘されているが、すべて外国人対応の課題に関連していることが特徴的といえる。

モニタリング項目 No.20 とりまとめ状況

1. 対象団体

エコツーリズム検討会議の構成員や提案事業に取り組む 11 団体を対象に、資料 1-3 に示した調査シートの内容について聞き取り調査を行った。

No.	団体名	No.	団体名
1	環境省	7	知床小型観光船協議会
2	林野庁	8	知床羅臼観光船協議会
3	斜里町役場	9	知床財団
4	羅臼町役場	10	知床ウトロ海域環境保全協議会
5	知床ガイド協議会		
6*	知床斜里町観光協会 知床五湖冬期利用促進事業検討部会	11*	知床羅臼町観光協会 赤岩地区昆布ツアー一部会

*調査対象が重複したため、1 団体として聞き取りを行った。

2. 結果

①「知床エコツーリズム戦略」の基本方針について

【基本原則】	該当
遺産地域の自然環境の保全とその価値の向上に貢献している。	9 団体
世界の観光客への知床らしい良質な自然体験を提供している。	9 団体
持続可能な地域社会と経済の構築に役立っている。	9 団体

【エコツーリズムを含む観光利用の推進にあたって必要な視点】	該当
事業、ツアーが、地域主体・自律的・持続可能である。	9 団体
事業、ツアーでは、共有・協働・連携などのネットワークが構築されている。	9 団体
自然環境の保全に配慮している。	10 団体
利用者の自然生態系に関する理解が促進されている。	8 団体
事業及びツアーが、地域の文化・歴史的背景を踏まえて実施されている。	7 団体
利用者へ自己責任の原則が認知され、管理責任の分担が行われている。	5 団体
事業、ツアーは知床のブランド価値を高めるという視点がある。	8 団体
事業、ツアーは順応的管理型で実施されている。	7 団体

【「該当」と回答しなかった者の意見】

- ツアー等の実施主体でないため回答できない項目があった。
- 戦略をよく知らない。設問の意図が分からない。
- 対象事業が広すぎて回答が難しい。

「知床エコツーリズム戦略」に則り、特に力を入れて取り組んでいることや、新たに始めた取組があるか

- 知床五湖利用調整地区の立入規制期間を変更（自由利用期→植生保護期）することとした。
- 新たに取り組んでいることは事業の中ではないが継続的に事業に取り組んでいる。
- 近年流氷に対する関心が高まり、ドライスーツを着用しての「流氷ウォーク」に参加はハードルが高い人に対しての安全に流氷とふれあうツアーを企画、プラス知床博物館でオオワシ・オジロワシを見学後、知床の歴史及び知床の古代文化を見てもらうツアーが好評。
- 情報共有について、海上状況はもとより、動物の確認場所の共有に力を入れ乗船客のニーズにできるだけ応えられる環境づくりに取り組んでいる。
- 観光船のエンジンは環境に配慮したものを使用している。スクリューもクジラやシャチに配慮したものを使っている。
- 外国人向けの登山道地図の発行
- リアルタイム観光情報共有システム「知床情報玉手箱」の管理運営。これを通じた地域関係者との観光情報の共有。外国人を含めた観光客への情報発信。
- 知床自然センター等拠点施設のリニューアル。
- ケイマフリなど海鳥の保護と利用の両立を目指し、知床の価値を高める活動を行っている。特に、海鳥の調査の結果に基づいて保護と利用を行っている。

②エコツーリズムに関わる利用者・参加者の数や意識、行動の状況について

利用者・参加者の数

増加している	7 団体
減少している	なし
どちらともいえない・未回答	4 団体（取扱う施設・ツアー数等が多く一概に言えない）

利用者・参加者の意識

変化している	4 団体
変化していない	なし
わからない・未回答	7 団体

利用者・参加者の数や意識、行動について、気付いた点や気になる点はあるか

- クマの人慣れが進んだ結果、クマが人間をあまり気にしないので、人間側もクマへの警戒が薄れてきているように感じる。
- 羅臼岳登山者（ウトロ側、羅臼側ともに）について、外国人が多くなってきた。外国語の対応が不十分で、マナー啓発のための看板がないため、羅臼平での焚火跡があるなどの問題な行動も見受けられる。ピクトグラムや外国語看板の整備が必要。
- 羅臼湖利用者について、昔に比べて路上駐車が減ったイメージ。またゴミも少なくなったと感じる。
- 自然環境への配慮は十分に理解されていると感じる一方で世界遺産に関する知識はあまり無いように感じるが、ツアーを通して理解している様に感じる。
- 漁師やガイドの話をメモする人や、ツアーをもっと多くの人に知ってもらいたいという利用者が多くなってきている。
- 知床を知るにはガイドが必要と言う認識が定着してきた。また知床は1日という時間では無理という認識の常連泊のお客の増加傾向にある。これは観光に携わる人達の努力の成果だと思う。
- 知床好きのリピーターはある程度おりますが、まだ全体としてはそんなに増えているとは思わない。知床リピーターをこれからどのように増やしていくかが課題である。
- 知床はまだクマ観光の要素がつよくその為の色々な問題を多く抱えている。ニュース報道でクマが道路脇に出没で危険と言う情報が一般の人には「知床に行けばクマを気軽に観られる」と受け取られる。ひとつ間違えば大事故につながりかねないので、「知床ルール」というのが必要になってくる可能性がある。
- 連泊客が増加した影響もあり、当日予約者が増えてきているように感じられる。天候を見て乗船を検討する人や、現地についてから何をするか決定するなど。
- 日本中にシャチを見たいという人が多くなり、更にリピーターも増えた。
- 施設の入り込みは概ね増加傾向。
- 利用者数も大切だが、数の増減だけで判断・評価しがちな印象を持つ。保全と利用の観点からは滞在時間や消費額、満足度などの指標が重要であり、これらの定期的・定量的な調査が不十分と感じている。また、外国人の動態に関する知見も不十分であるのが課題。
- 利用者意識や行動については、訪問の動機や期待する体験が多様化していると考えられる。ニーズが多様化している一方、フィールドやアクティビティのバリエーションや質が追い付いていないのが現状。
- 管理責任や安全対策、管理の縦割りなどが弊害となり、自然の中でより深く、より自由に楽しむ場所や機会が減少していると感じる。

③ツアーで使用しているフィールドや地域の自然環境について

気になることや心配なことがある	11 団体
気になることや心配なことはない	なし

- クマによる人身事故のリスクが高まっていること。
- 海岸ゴミの問題について、特にルサ側の海岸巡視時に、漁具等の産業ゴミが多く、景観所良くない状態である。
- カムイワッカ湯の滝について、落石の危険性があるとしている通行止め区間について、現地調査以来、事業が進んでいないことから、通行できるよう対応が必要。
- 人間側の問題もあるが、ヒグマの人慣れや住宅地への出没など、人間の財産に被害が発生しており、いつ直接的被害が発生してもおかしくない状況である。一方で、海獣類の漂着が増加しており、衛生的な問題だけでなく、ヒグマが餌付くなど危険な状況が増加することが懸念される。
- キタキツネ、エゾタヌキ、オオセグロカモメなどが生息地または営巣地として住宅地周辺を利用している。人間に攻撃する被害、騒音や糞による被害、エキノコックスや狂犬病の感染が懸念される。
- 事業やツアーがしにくい行政においては、このアンケートでは記載が困難である。
- 暖冬によるツアー実施日の短縮。
- 年々ヒグマ出没が増えているなか、十分なスタッフが必要だと思います。
- 観光客増加に伴うツアー数の増加により、ツアーコースの一極集中が顕著になってきている。
- 近年の温暖化の影響かもしれないが、強風による倒木が増えてきている。近年の湿った重い雪が降り樹木に積もった雪が風で飛ばず、そのため風を受け樹木が倒れたり、折れたりするためと思われる。鹿の樹木の食害で樹木が枯れ、風が通りやすくなったことも一因と考えられる。
- 鹿を減らしたことにより、植物の復活が多く見られ、花が増えてきている。只、鹿が笹の新芽を食べなくなったことにより、笹が高くなりクマが隠れやすくなっている気がする。
- 春先の雪解けが早くなりクマが穴から出てくるのが早くなると、クマの春先の餌が心配。前はよくクマが取った鹿を隠した土まんじゅうなどが見られたが今はあまり見られない。(残雪があればしかを捕まえられるが雪がないと狩りが難しくなる。)
- 海水温の上昇に伴い、魚やそれを捕食する海鳥に変化がいつ大きく現れるか分からない。事業者として自然への負荷をできる限り軽減したいと望んでいるが、双方のバランスがとれているとは考えにくく、取り組む規模としてはあまりにも大きすぎる。
- 漁業境界線は超えないよう気を付けて運航している。
- 気候変動の影響については、長期的に大きな課題。知床においては気候の激化という形で表面化しつつあるように感じる。極端な寡雪や豪雨などが目立っており、フィールドの維持管理や情報提供においても、適応策が必要。

- ヒグマとの軋轢はあらゆる場所で課題。観光面においては遭遇件数の増加や人馴れの進行という形で表面化しており、この傾向は当面継続するものと考えられる。ヒグマの動態や個体数をコントロールすることは現時点において技術的、社会的に難しい状況であり、利用者側の意識や行動の改善、管理システムの改善が必要。
- 利用者の集中するエリアと道路沿線においては、レクチャー等の情報提供やシャトルバス等によるアクセスコントロールは有効な手法と考えており、導入・拡大に向けた政策立案と合意形成が必須な状況。ただし、これらは利用者ニーズを充足し、フィールドのバリエーションや利用の自由度の拡大を約束するものでなければ受け入れられないものと思う。知床五湖での取り組みは、こうした課題について一定の成果があり、知見も集積されていると考えられる。
- 登山道や先端部地区等のバックカントリーの利用については、外国人も含めて一定のニーズが見込まれる一方、安全対策や環境保全の観点からの情報提供や受け入れシステムが必要です。海域を含めたこうしたフィールドは、知床の核心であることから、ルールや制度による保全担保が必須である一方、知床のシンボルとして強い発信力とブランド形成に寄与する可能性がある。
- ガイドツアーについて、フレベの滝や知床五湖は管理されていると思われるが、その他の象の鼻や男の涙などの場所はどのように管理されているのか。ガイドそれぞれが秘密の場所のようなコースがあり、クマゲラや猛禽類などの希少生物や踏圧の影響がないか心配である。
- 知床自然センターの駐車場拡張について。知床自然センターや 100 平米運動のきっかけは、知床伐採問題であると考え。全国から知床の森を守ろうと多くの人達が集まった。その知床において自動車での利用者の増加や五湖のバス利用のために駐車場内や自然センターの前側の林を全て伐採して工事を行った。これは、由々しき事態であり非常に残念な行為である。利用の利便性を優先するあまりに林を皆伐するとは、世界自然遺産・国立公園において、あってはならない行為である。駐車場を拡張するにも他に方法はあったはず。

④その他（外国人の動向、エコツーリズムに対する意見等）

- エコツアー戦略に基づく提案数が少ないことが気になる。提案者のメリットをもう少し打ち出せると良いのではないか。
- 外国人登山客の利用状況について、昼過ぎなど、中途半端な時間帯に軽装で山の中腹に登っている利用者をよく見かける。登山に対する認識のずれを埋めるための工夫が必要（山小屋はないことや、天候、リスクの情報発信など）。
- ヒグマによる交通渋滞や危険事例が発生し、社会的な問題として注目が集まっており、野生動物との軋轢解消が課題であり、カムイワッカ地区をはじめ園地の魅力向上が必要。
- 羅臼町市街地を歩いている・無料温泉の利用・飲食店を利用している欧米人を見かける一方で、コンビニについては、アジア圏の利用が多い。ただし、必要最低限のお金で（観光船等、自然を観察するためにはお金を利用している）観光している様に感じる。
- 今後エコツーリズムで観光地として羅臼町を強く推していく場合、現状の制度では問題が発生する可能性が高い。そのため、現状できることから物事を進め、最終的に自然保全を考慮した観光で羅臼町が繁栄していくことが理想である。
- 外国人旅行者は前年並み。宿泊ベースで全体の 10%程度(11 月末現在)。流水時期の伸びに期待する。国別では欧米系が若干増えている。
- 世界的に昆布が有名になってきているのを利用し昆布を通して知床のエコツーリズムを伝えていくことができるのではないかと考えている。
- インバウンドに関しては、アジア以外のお客が増えている気がする。個々での対応には限度があるので、知床としてのインバウンド対応の窓口が必要だと思う。
- 知床には規制で入れない箇所がある。ルシャ・半島先端部等貴重な自然があるからとの理由等で入れないが、一般の人には何が貴重で入れないのかが分からない。例えば年に 2～3 日間 1 日 10 名前後の人を事前応募で案内して「このような貴重な自然があるので規制しています」と理由を理解してもらう事がこれから大切と思う。その代わりそれなりの金額一人 10 万円でももらうべき。インバウンドが増えている理由の一つに、日本は何でも安いとの理由がある。
- 新しいフィールドコースが必要(例：ポンホロ(国民健康保安林)から開拓跡地(自然教室キャンプ場)自然センターまで)。ポンホロ入口は S 字カーブで狭く駐停車が危険のため、バスの羅臼線のポンホロ入口付近にバス停を新設してもらう。
- 総合的な情報発信と利用の促進について検討していただきたい。利用者へのメリットについても周知・利用ができる環境を願う。
- 定期路線バスの羅臼ウトロ線の時刻や便数を変更する必要がある。ウトロから羅臼の路線バスができた頃はまだ羅臼で観光船を営業していなかった。現状は、ウトロ宿泊で羅臼の観光船に乗りたい場合、マイカーやレンタカーしか観光船に乗れない。羅臼発の路線バスの最終出発時刻を 16:00 にしてほしい。
- 外国人については増加傾向が続いているが、施設やフィールドによるばらつきが大きい。

こうした傾向を把握したうえでの対策が必要ですが、信頼できる統計が少ない。

- 外国人といっても、国や個人属性によりニーズや意識などは多様であり、その幅がより広がっているのが現状。また、外国人は知床だけではなく、本州も含めて周遊的な利用形態が主流。知床を訪問するにあたっては、トレッキングなどの自然体験や野生動物観察などの体験を期待する傾向が強い一方、こうしたニーズに充分に対応できていない。
- 制度やルールは重要ですが、これを的確に伝え、理解していただくことがより重要。そのような意味で、「わかりやすさ」や「合理性」などへの配慮が求められる。「五湖の利用調整地区の制度」「マイカー規制の乗り換え場所（五湖まで車両乗り入れできるにも関わらず、乗り換えできない）」「羅臼湖のルール」などについては、外国人に説明し、納得いただくのが難しい内容もある。
- 外国人観光客が来られても恥ずかしくない「知床」にしたい。

(評価者：適正利用・エコツーリズムワーキンググループ)

モニタリング項目	No.21 利用者数の変化		
モニタリング実施主体	関係行政機関、事業者等		
対応する評価項目	VII. レクリエーション利用等の人為的活動と自然環境保全が両立されていること。		
モニタリング手法	利用者カウンターによるカウントおよびアンケート調査等により主要利用拠点における利用者数を把握		
評価指標	各利用拠点等の利用者数		
評価基準	基準なし（利用者の実態を把握し、様々な施策の検討の際の基礎的な情報を収集するためのモニタリング）		
評価	☐ 評価基準に適合 ☐ 評価基準に非適合		
	☐ 改善	☐ 現状維持	☐ 悪化
	[評価対象期間]2015 年～2019 年 [評価] 全体として、2015 年から 2019 年にかけての斜里町・羅臼町の観光入込者数は、基準年（2010-2014 年）と比較してともに横ばいである。 利用者数が突出している知床五湖の高架木道および地上遊歩道、ウトロ地区観光船は微減傾向にある一方、カムイワッカ湯の滝や熊越の滝、羅臼地区観光船などが増加傾向であることから、利用の分散化が徐々に促されてきたものと思われる。知床五湖については、厳冬期エコツアーは毎年大幅に利用者数を伸ばしており、新たな利用が注目されていることが窺える。 羅臼湖歩道、サケ・マス釣りの利用者数は大幅に減少した年があるが、最新の 2019 年には概ね基準年並みの利用者数となった。 知床連山登山道利用者数については僅かに増減を繰り返し、明確な傾向は見受けられない。 観光 4 施設においては全て増加傾向にあり、特に知床自然センター、知床羅臼ビジターセンターは基準年と比較して約 1.5 倍もの利用者数となった。		
今後の方針	当面は評価基準なし。利用者の質の向上については利用者数のみでは測れないことも留意し、No. 20 および No. 21 と突合しながら知床全体のエコツーリズムの動きについて注視していく必要がある。 今後、遺産登録前からの利用の変動幅などに明確な傾向が確認できれば、評価基準の設定を検討する。		

No. 21 利用者数の変化 調査用シート

過去5年間(2010～2014)の平均を基準値とし、これに対する増減を表現するアイコンを追記

項 目		過去5年平均 2010-2014	2015年 (H27)	2016年 (H28)	2017年 (H29)	2018年 (H30)	2019年 (R1)	備考					
全 体	斜里町観光入込数	1,208,215	➡	1,210,887	➡	1,195,668	➡	1,209,075	➡	1,140,221	➡	1,222,580	
	羅臼町観光入込数	535,244	➡	580,733	➡	537,831	➡	554,385	➡	508,050	👉	476,974	2019年未確定
知 床 五 湖	五湖園地全体利用者数 (駐車場利用者数＋シャトルバス五湖利用者数)	381,614	➡	366,967	👉	322,102	👉	335,803	👉	305,926	👉	330,073	2018の誤記を修正
	知床五湖高架木道利用者数	257,305	➡	250,601	👉	212,668	👉	214,599	👉	195,127	👉	219,042	
	地上遊歩道利用者数	86,604	👉	76,855	👉	67,697	👉	74,217	👉	70,854	👉	66,885	
	知床五湖冬季利用者数	181	👈	939	👈	2,539	👈	2,371	👈	2,320	👈	2,784	
カ ム イ ワ ッカ	カムイワッカ方面シャトルバス利用者数 (カムイワッカ以外の利用を含む)	13,191	➡	13,765	👉	9,684	➡	12,240	👉	10,634	➡	12,167	2018の誤記を修正
	カムイワッカ来訪者数	41,076	👈	56,458	👉	43,265	👈	64,116	👉	47,651	👉	53,040	2018の誤記を修正
和 ベ ツ	フレベの滝利用者数（フレベの滝カウンター調査）	47,902	👉	42,024	👉	42,496	➡	51,337	➡	47,406	👉	54,927	
登 山 道 等	連山登山道利用者数（岩尾別カウンター）	5,513	👉	6,234	➡	5,298	➡	5,115	👉	4,863	👉	3,861	2019年未確定
	連山登山道利用者数（硫黄山カウンター）	749	👉	720	👉	577	➡	815	👉	912	👉	701	2010は閉鎖
	連山登山道利用者数（湯ノ沢カウンター）	438	👈	818	👉	345	-	➡	463	👉	393		
	岩尾別登山口、羅臼温泉登山口および硫黄山登山口における 入林簿等からの縦走利用者数（入山ベース）	341	👈	463	👉	414	👉	435	👉	285	➡	324	2019年未確定
羅 臼	羅臼湖登山道利用者数（羅臼湖カウンター調査）	2,778	👉	2,056	👇	1,632	👇	842	👇	1,778	👉	2,317	
	熊越えの滝利用者数（熊越えの滝カウンター調査）	911	➡	885	👉	1,034	-	👉	1,139	👈	1,232		
先 端	陸路による知床岬、知床沼方面利用者数 (ウナキベツ・観音岩カウンター調査)	201	👉	167	👉	224	-	➡	199	👉	220		
	ウトロ地区観光船利用者数	191,021	👉	163,363	👉	141,872	👉	157,379	👉	135,716	👉	150,597	
海 域	羅臼地区観光船利用者数	16,267	👈	23,985	👈	23,421	👈	29,747	👈	33,405	👈	37,289	
	シーカヤック利用者数	1,095	➡	987	👇	636	➡	1,160	👉	815	➡	1,093	2019年未確定
	サケ・マス釣り利用者数　ウトロ	6,813	➡	7,317	➡	6,199	👉	5,065	👉	4,959	👇	4,203	
	サケ・マス釣り利用者数　羅臼	723	➡	759	👇	486	➡	719	👉	842	➡	750	
主 要 施 設	知床自然センター利用者数	173,463	➡	159,051	➡	173,206	👉	192,542	👉	216,967	👈	257,595	
	羅臼ビジターセンター利用者数	33,419	👉	41,159	👉	41,895	👉	42,734	👈	45,421	👈	49,607	
	知床世界遺産センター利用者数	99,218	👉	115,227	👉	116,831	➡	105,002	➡	104,192	👉	126,023	
	知床世界遺産ルサフィールドハウス利用者数	6,983	👉	7,687	👉	6,184	👉	7,931	👈	9,132	👈	9,383	

*アイコンの凡例

- ⬆ 基準値より 30%以上の増加
- ➡ 基準値より 10%以上 30%未満の増加
- ➡ 基準値より ±10%以内の増減
- ⬇ 基準値より 10%以上 30%未満の減少
- ⬆ 基準値より 30%以上の減少

※参考情報

(評価者：海域WG)

モニタリング項目	No. 6 ケイマフリ・ウミネコ・オオセグロカモメ・ウミウの生息数、営巣地分布と営巣数調査		
モニタリング実施主体	環境省釧路自然環境事務所		
対応する評価項目	II. 海洋生態系と陸上生態系の相互関係が維持されていること。 III. 遺産登録時の生物多様性が維持されていること。 IV. 遺産地域内海域における海洋生態系の保全と持続的な水産資源利用による安定的な漁業が両立されていること。 VII. レクリエーション利用等の人為的活動と自然環境保全が両立されていること。		
モニタリング手法	ウトロ港から知床岬を経て相泊港までの区画ごとの繁殖数をカウント。ケイマフリは、生息が確認されている範囲において海上の個体数をカウント。営巣数の変動についても記録する。		
評価指標	営巣数とコロニー数、特定コロニーにおける急激な変動の有無。		
評価基準	おおよそ登録時の営巣数が維持されていること。		
評価	☐ 評価基準に適合		☒ 評価基準に非適合
	☐ 改善	☐ 現状維持	☒ 悪化
	[評価] ケイマフリの巣数は平成 14 年(2002 年)以降緩やかに増加(年 1.7 巣, $p=0.02$)平成 9 年(1997 年)以降ウミネコは減少(年 19 巣, $P=0.002$)、オオセグロカモメは減少(年 53 巣, $P=0.000$)、ウミウは減少(年 14 巣, $P=0.006$)している。希少種は保全されているが、他 3 種は急速に減少している(10 年間のおよその減少割合はウミネコ 100%、オオセグロカモメ 60%、ウミウ 30%: およそ VU に相当)ので、悪化と判断した。遺産登録時の生物多様性(III)とは異なる状況である。しかしながらその原因は不明であり、直ちに改善策を取るべきか判断しかねる。		
今後の方針	捕食者(オジロワシ、ヒグマ)の影響もふくめ、ウミウ、カモメ類の減少原因を明らかにする調査が必要である。		